

がぶつくしと輸入

急増する輸入野菜。二〇〇一年の野菜輸入量は二七〇万トンで、十年前に比べ倍増した。特に中国からの輸入が増加しており、わが国の輸入野菜の過半を占めるようになってきている。ここ数年の中国からの輸入増加は、外食などの業務用需要の増大が原因といわれ、中国からの安定的な野菜の供給は、すでに構造的なものになりつつある。

わが国に入ってくる中国産野菜は、ほとんどが開発輸入によるものである。開発輸入は、日本の種苗会社から種子を買い、日本人技術者が栽培指導を行い、現地では日本の規格に合った形で選別・出荷されたものを輸入することである。生産から輸入までを仕切っているのは日本の商社や食品メーカーであるため、開発輸入の野菜は問題はないと考えられていた。しかし、中国から輸入された野菜から国の安全基準を超える残留農薬が相次いで検出される事件が発生した。本書は、こうした中国産野菜の実態を追ったものである。農産物を安く購入できることは消費者にとってはありがたいことである。しかし、

「食卓に毒菜がやってきた」

灌井宏臣著（コモンズ）

安全性について何も問題がないという訳ではなかった。中国産野菜の残留農薬問題は二〇〇二年に急増したわけでは決してなく、最近まで安全性について議論されていなかったのだという。現地の農家は日本企業と契約しても市場価格のほうが高いと契約をホゴにして売ってしまうため、現地の市場から買収するいわゆるスポット買いのケースも少なくないようだ。そのため残留農薬が基準値を超えたものが混入している可能性は小さくなく、開発輸入だから安心とい

う訳にはいかないという。本書では、激増する輸入野菜にわが国は水際の防御体制が対応できていないのが実情であると指摘する。中国産に限らず、輸入野菜にはさまざまな負のリスクがつきまわっており、くん蒸のリスク、ポストハーベスト農薬のリスク、栽培過程における農薬汚染のリスク、鮮度の劣化とそれにもなう栄養価の低下、の四つが問題であるという。特に中国産野菜については、使用禁止農薬の検出や何種類もの農薬が一度に検出されたことの事実を指摘し、安全

性に関する最大の疑惑は、の栽培過程にあるとしている。著者は「すべての輸入野菜の品質が悪いとは言えないが、四つの負のリスクを背負っていることは間違いない。安さばかりに目を奪われていると、とんでもなく危ない代物を食べさせられるハメになることを忘れてはならない。」と警告する。中国で安全基準を超える残留農薬が検出されたという報道は、日本のマスコミでも大きくとりあげられた。こうしたことから、厚生労働省は検査を強化し、ロット検査を開始した。特定の国の輸入品を対象にした全ロット検査はきわめて異例だという。

本書では、日本では手薄だった検疫の実情のほか、すでに八〇年代末から中国産野菜による残留農薬中毒の被害が問題になっていた香港での対策等をリポートしている。

著者は「食料輸入の弊害は、環境や食品の汚染にとどまらない。日本国内の食料の自給率を低下させ、農業を破壊する。」と主張する。そこで、安全な野菜を食べ環境を守るために、日本の消費者はできるだけ自分たちの住んでいる地域で生産された食べ物を選ぶ「地産地消」を実践することが大切だと説いている。共感できる提言といえよう。（二〇〇二年八月、一〇六頁、一五七五円）

（中村光次）